

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	19 / 2006 / 21-27
タイトル	ふるさと雪形探訪Ⅱ 三方から眺めた八甲田山の雪形伝承
著 者 名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

《ふるさと雪形探訪Ⅱ》

三方から眺めた八甲田山の雪形伝承

第10代 室谷洋司

1. 青森市から眺望

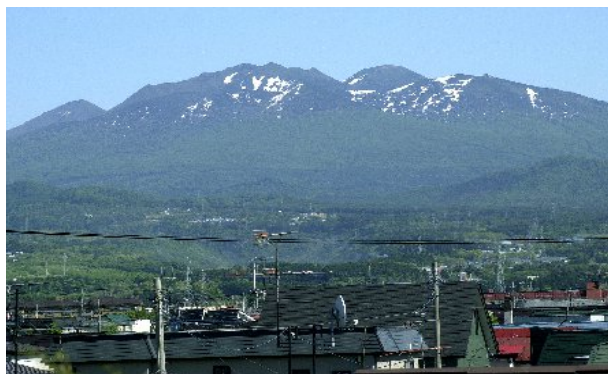
真澄が記録した「蟹ハサミ」と「牛クビ」

三河の人・菅江真澄がのこした数十冊の日記は民俗学の宝庫にふさわしい。20数年前に雪形調査を始めたころ、活字の復刻本をむさぼるように読んだ。八甲田山の雪形の記述が数行みつき、絵かきの真澄のことだからと何となく原本に絵図の存在が匂った。

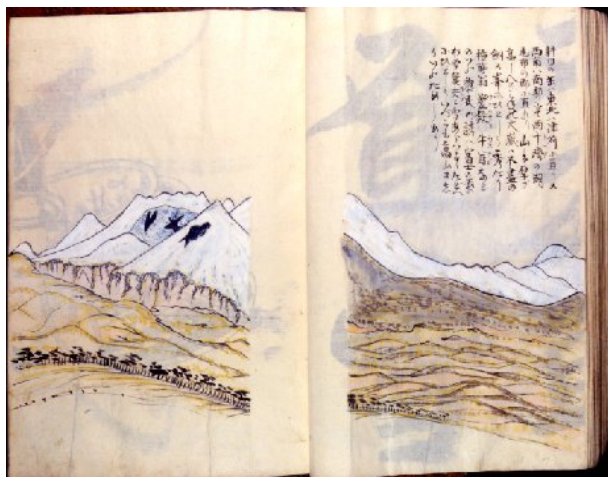
その日記「すみかの山」は当時、秋田県立秋田図書館の所蔵で許可を得て調べた。一連の日記は同県重要文化財に指定されている。現物を手にしたときは感激のあまり震えが止まらなかった。狙いどおり見開きの着色絵図が綴じ込まれていた。

200年前の寛政8年(1896年)5月、真澄は青森市の郊外を巡っていた。三内丸山の縄

文遺跡を訪ねた半月ほどあとのことで、八甲田山の残雪模様を次のように記録している。



<写真1> 青森市街から見た八甲田山。中央の赤倉岳山頂下に「蟹ハサミ」(別名 Y)「牛クビ」(別名 Z)が完成。左手には「三本鍬」も見え。前岳斜面の「種まき爺」は消えかかっている(2001年6月4日)



<写真2> 約200年前に菅江真澄が描いた雪形絵図(日記「すみかの山」)

「この峰に種蒔老翁,蟹このはさみ、牛の頭などという春の残雪が見える。雪もやや消えてゆき、苗代をまくころになると、山に種蒔老翁といって、残雪の人のたっている姿に見え、そして蟹このはさみに見えるころ田をかきならし、牛のくびに見えるころ、早苗をとって植える。農耕のそれぞれの季節に、残雪がそれぞれのかたちであられる。そして雪は六月のなかばに、すっかり消えてゆく。」(文章は「すみかの山」)平凡社訳本から)

これは、わが国の雪形を民俗学的にとらえる上で第一級の史料で、残雪絵図がその価値を高めている。絵図には田圃が広がり、かなたには八甲田山(耕田山)が悠然として、「種蒔老翁」と「蟹の鋏」「牛の首」がクッキリと浮き出ている。後者二つは白く出るの

で誤りがあるが、これは土地の人の伝聞をもとにあとで記したからかも知れない。

200 年前の風景と今を見比べると、雲谷峠から平地にかけては、見る影もなく原型が失われた。しかし、雪形は前岳と赤倉岳のオモリトドマツ帯から山頂付近にかけて見られることから、真澄の時代からまったく無傷と言ってよい。もちろん八甲田山の山容が確定した二千年近く前から、私たちの祖先に季節の情報と山の恵みを与えてきたことは間違いない。

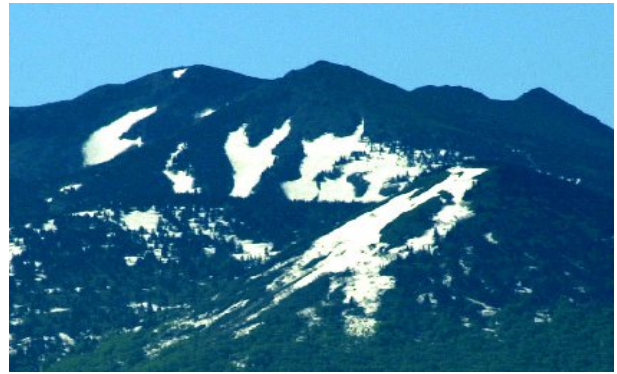
時代が移り戦後になってからは農業技術が発達し、種蒔きから田植えなどの作業はその年々の気候に関わりなく進められるようになった。しかし 20 数年前までは、あたりの田圃や畑で作業をする年配の人たちに聞くと、これらの雪形についてよく知っていたし、「牛クビ」には、白と黒のまだらがあることから「藤ベゴ」とか「ホルスタイン」といったハイカラな表現をしたりした。

市街地では「蟹ハサミ」は「Y」、

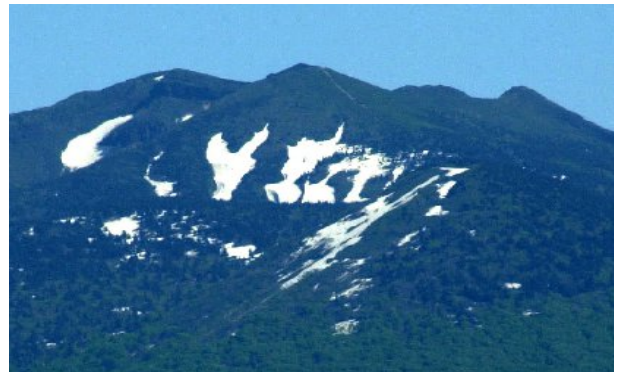
「牛クビ」は「Z」に

一方、雪形のことを青森市街地で尋ねると、戦後まもなく少年、青年時代を過ごした人は「蟹ハサミ」はアルファベットの「Y」、「牛クビ」は「Z」に見立て、この「YZ」がクッキリ見え始めると運動会とかスポーツ・シーズン到来を、女性たちは衣替えを実感すると答えてくれた。「雪形」が伝えるメッセージは、人々の暮らしのありようで様々に変わってきている。この先、次代の子どもたちにどのように伝えていったらいいのだろうか。

私の生まれ育ったところは、青森空港を下りてすぐの高田地区。田圃や畑に囲まれた



<写真 3> 「種まき爺」が黒く完成(2001 年 5 月 29 日)



<写真 4> 「蟹ハサミ」「牛クビ」が見ごろ(2001 年 6 月 4 日)



<図 1> 雪形のイラスト



<写真 5> 「種まき爺」が完成すると近くの野草園でクマガイソウが満開

農業地帯で、春も一段落したころ母からよく「雁」が現れたと聞かされた。これは青森市街地から見た「蟹ハサミ」あるいは「Y」の変形で山麓に向けて飛ぶ雁そっくりなのである。八甲田山は八つの峰が南北に連なり、見る位置によって山肌も雪形も刻々と変わっていく。

さらに七戸町など東方向から、十和田市など東南方向からは山の姿がガラリと変わり、それぞれそこに住む「オラだちの山」で、現れる雪形も違ってくる。

2. 十和田市から眺望

ガラリと変わる八甲田の山容

日本の国土は八割が山地で、山は心の故郷といわれる。それだけに山名には、ふもとの人々の思いがこめられている。

同一の山でも必ずしも名前は一定ではない。岩淵功は旧藩時代からの史料に当たり北八甲田の主峰・大岳にはカウタ嵩、大嶽、酢ヶ湯嶽、釜伏山(以上、津軽)、駒ヶ岳、駒形嶽、青森嶽(以上、南部)などの山名を確認している(「八甲田の変遷」、1999年)。それぞれに意味合いがうかがわれ、駒ヶ岳と駒形嶽(岳)は、馬の形の雪形にちなんでいる。

北八甲田を、東南部の十和田市十和田湖町地区から見ると、青森市とは山容がガラリと変わる。土地の人たちは、その峰々に雪形から名前をつけて親しんできた。

中道等(郷土史家)の描写は、当を得て伸びやかだ。

「第一に目につくのが高田大岳。雲をしのぐ雄偉さで、その円錐形の山と美しくひく裾野が、見る人々にいつまでも嘆声を放たせる。よく晴れた日なら、左の肩に八甲田山中の主峰と



<写真 6・図 2> 十和田湖町地区からの北八甲田の峰々。右から高田大岳、小岳(旧名・鳶形岳)、硫黄岳(同・松形岳)。それぞれに雪形が現れる(2001年5月20日)

いわれる酸ヶ湯大岳をのぞき、その下方にはっきりと鳶形岳、その左に松形岳。この鳶と松は春、ここが初めに雪が消えて黒く跡を見せる。羽をひろげて天翔ける鳶の姿、どっしりと能舞台の背景の絵になる老松のさま。それから山の名が生まれた。」(「十和田村史」、1955年)

さらに高田大岳について民俗学者の岩科小一郎は、「残雪が馬の形になるのを駒の雪といい、[それが整うと]田の神さまがお下りになったといって田植えの季節になる。」(「山の民俗」、1968年。[]内は筆者)

雪形「鳶」「松」から山名が生まれる

十和田湖町地区から見える「駒」「鳶」「松」の雪形とは一。

1980年代の数年間、これらを撮影しようと未明の3時に青森市をたち、八甲田を越えて当地区に向かった。良く形の整った雪形の撮影は難しい。その年の天候具合で山の雪消えが異なり、気温が低い時期だと空気も澄み切ってクリーンな写真が撮れるが、形が完成するころは最近では田植えの真っ最中で、水蒸気が充満し山が隠されてしまう。また青森市が雨でも現地は快晴のときもある。とにかく行くしかない。この時期は、出勤前の5時間を雪形の撮影行にあてた。

高田大岳の「白馬」(駒)の完成には、2001年の場合、5月上旬から観察を始め約50日を要したが、どのような姿が現れるのか雪消えのドラマはスリルがあった。6月17日、東方を向いた白馬が完成。前足が2本、目までついている。その端正な姿にしばし見とれた。

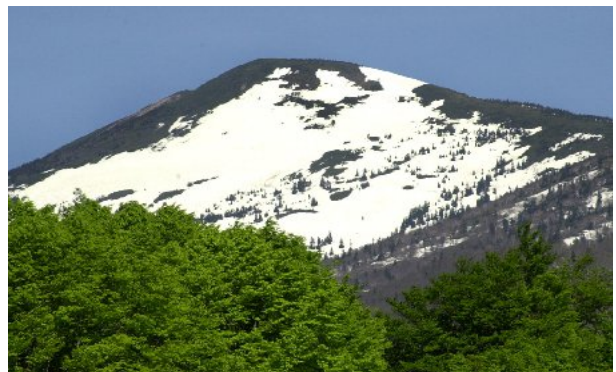
三つの雪形のうち一番早く、しかも命の短かったのは「鳶形」(山名・鳶形岳または飛嶽)。中道等が能舞台の老松と表現した「松形」(山名・松形岳)もそれに次いで現われ、間もなく消えた。

故郷の山を見て季節の移ろいを感じとる。この昔の人の風雅な気持ちと、微細な変化を逃さず農作業の目安にするといった知恵深さに脱帽した。

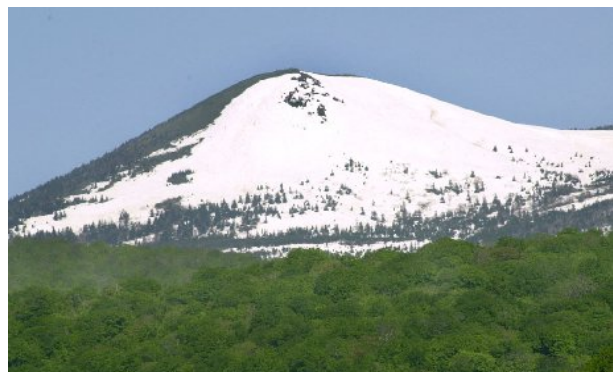
時代がくだって、鳶の天翔ける山が小岳に、松の能舞台が硫黄岳に改名された。何と無機的で冷たい名前だろう。硫黄岳にいたっては陸地測量に雇われた地元の人が、硫黄沢の上といったので、そう名付けた



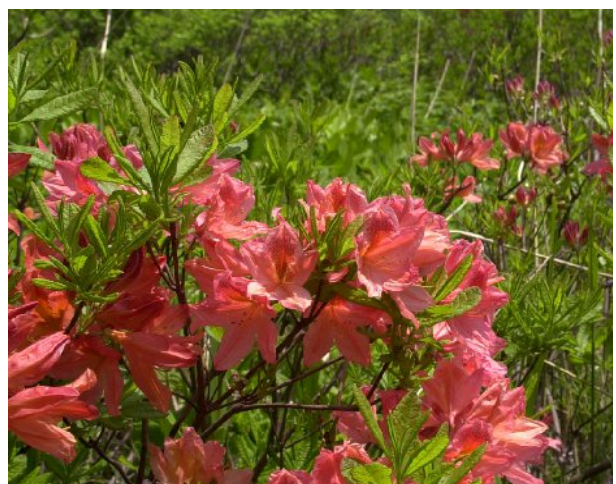
<写真 7> 高田大岳に「白馬」(駒)の雪形が完成(2001年6月17日)



<写真 8> 小岳に現れた「鳶形」(2001年5月20日)



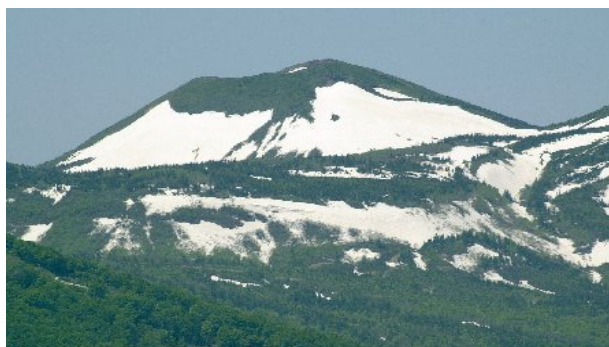
<写真 9> 硫黄岳に現れた「松形」。完成まであと数日(2001年5月20日)



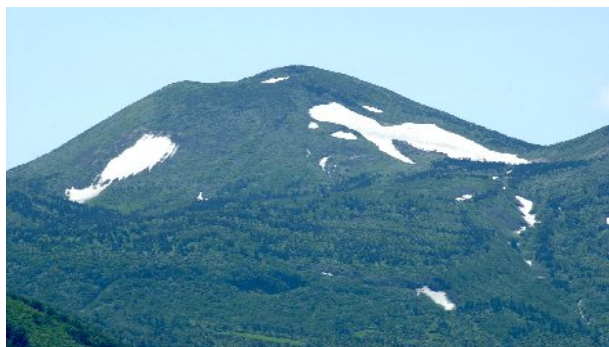
<写真 10> 「白馬」が完成する頃、レンゲツツジが満開



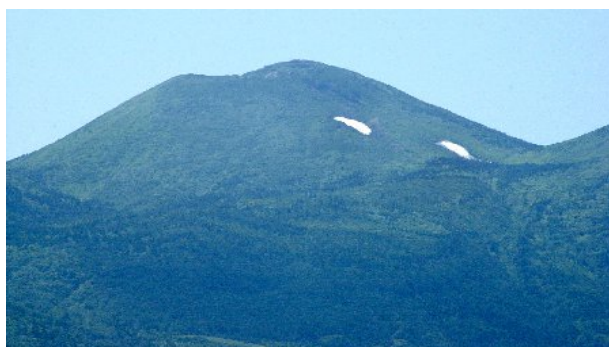
<写真 11> 七戸地方から見た八甲田。右側が北八甲田で一番高い高田大岳の右手に小さく見えるのが大岳。まだ純白だが、やがてここに「白馬」が現れる(2001 年 5 月 12 日)



<写真 12> 1 か月後になって大岳の斜面の残雪は、真ん中から左右に分かれ始めた(6 月 9 日)



<写真 13> 7 月 7 日の大岳。右側の残雪は「白馬」の姿に完成



<写真 14> 8 月 18 日の大岳。2 つの残雪は鹿内仙人が桂月に話した「白馬」の残骸で左が頭首部、右が胴尾部

という逸話(「陸奥の山水」、1931 年)もある。

高田大岳の「白馬」は、平年では 6 月初旬に完成し 8 月下旬に消失するが、これが二百十日(9 月 1 日)まで残る年は凶作になるという。明治 35 年、大正 2 年、昭和 8 年、9 年には 9 月下旬まで残り、東北一円が大凶作になったと年表に刻み込まれている。

3. 上北郡七戸町から眺望

馬産地の象徴「白馬」

十和田湖を世に紹介した大町桂月は、大正 11 年(1922 年)8 月 20 日、八甲田の主峰・大岳山頂に立っていた。案内は仙人といわれた鹿内辰五郎。鹿内は大岳の東斜面の雪田を見下ろしながら桂月にいった。

「右の脚下にも雪田あり、左の脚下にも雪田あり。雪解けの時、七戸方面より馬の形ちに見ゆることあり。この 2 雪田はその残骸なり。3 年つづきて馬の形ち見ゆれば、必ず凶作なり」と(「桂月全集」)。

雪田とは高山の雪がもつとも遅くまで残るところで、消えると岩や砂礫の一带は高山植物のお花畑になる。この残雪は八甲田を良く知る人や七戸の人たちには、「駒の雪」



<図 3> 「白馬」の雪形イラスト

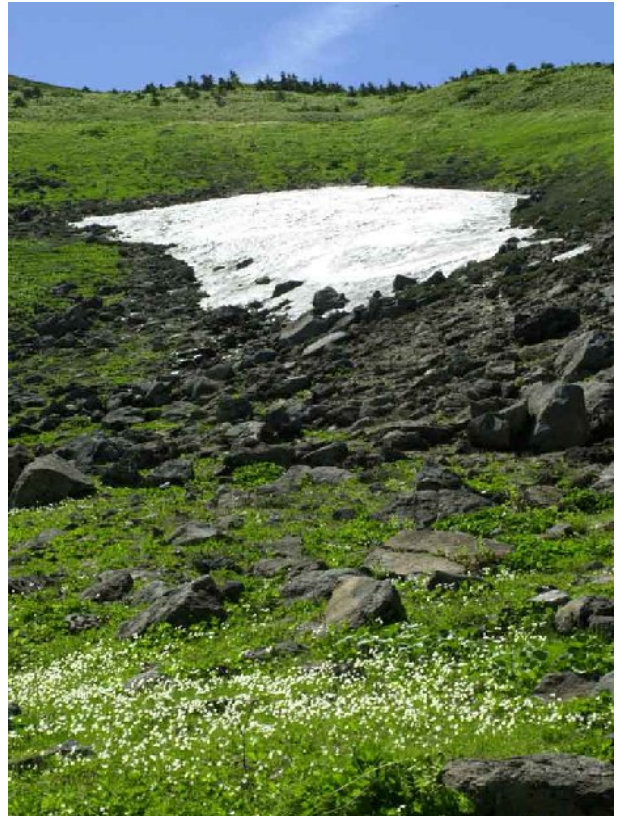
とか「白馬」と呼ばれ親しまれている。

七戸地方は藩政時代から名馬の産地として知られ、馬とは切っても切れない間柄。稲作ではヤマセに悩まされることから、農家の人たちは八甲田の「白馬」からその年の豊作か凶作かを予知し、重要な指標とした。

たとえば 200 年前の寛政 5 年(1793 年)に、水戸藩の木村謙次という人が七戸に滞在し、村人からつぎのような話を聞いている。平易な文章で紹介すると、

「ここから富士山のかたちに見える山を駒カ岳(大岳の昔の呼称)という。この山の残雪が駒の形になり、土地の人はその消える形で農作業の時期をうかがう。(残雪の駒の形の)口が切れるのは 3 月の時期で[したあご(下顎)が落ちる]と名づけている。(残雪の駒の形の)はらおび(腹帯)が切れるのは 4、5 月の時期で[はらひも(腹紐)が切れてしまった]といい、(雪が)残らず消え解けてしまうと農作物が熟すときとしている。」(木村謙次著、「北行日録」。陰暦使用で経過は今とは合致しない)

要するに、「白馬」のかたちになるのが遅かったり、その姿がいつまでも残っている年は凶作だと村人は恐れていたのである。



<写真 15> 「白馬」が消えたところには、八甲田の名花・ヒナザクラが咲き乱れる

「白馬」が豊凶を予知

2001 年。新世紀のはじめに、今一度それらの推移をキチンと記録しておこうと、七戸地方の田園地帯と八甲田大岳の 2 か所を定点観測の場所に定めた。写真撮影は 4 月 28 日に始まり、9 月 11 日までおよんだ。

七戸から望む八甲田は、いつも見慣れた青森からとはガラリと異なる。右側に井戸岳、左側には雛岳と高田大岳が迫って見える。その間に控えめに座しているのが大岳(旧名は雪形から「駒ヶ岳」)。整ったコニーデの山容は、はじめは全体が純白に覆われていた。

当地の田植えは津軽地方と比べものにならないほど早い。ヤマセ地帯の厳しさから、出来秋まで多くの日照を稼ごうとする苦労が読み取れた。大岳の「白馬」の姿は、なかなか浮き出てこなかった。ゆっくりゆっくりと形が変わり、七夕の 7 月 7 日によりやく完成。大岳斜面に左

方を向いた天翔る白馬の美しい姿となった。このあと季節が順調に推移すれば白馬はやがて二分して、それぞれが消え細っていくはずだ。ところがこの年は、左側の頭首部と右側の胴尾部がなかなか離れない。青森側から見た八甲田の雪は 7 月 29 日にすべてが消え失せたが、七戸からの場合、全部が消えたのは 9 月 11 日。あの世界を震撼させたニューヨーク同時テロの日で、このことから強烈に脳裏に刻みこまれている。

さらに思い起こすと、2001 年は真夏日がほとんどなかった年。ここに限らず青森県東部では、稲の生長は遅々として進まず農家の人たちは青刈りという悲しみを味わうのであった。

昔、このような年には、土地のひとたちはいち早く雪形から凶作を予知し、生きるための次の手立てを考えたのである。もちろん白馬は年によっては豊作をも予感させ、それに人びとは安どした。

(2005 年 9 月 11 日記)

- | | | |
|------|-----------------------|------------------|
| 引用文献 | 菅 江 真 澄 | 1796、すみかの山。 |
| | 菅江真澄(著)、内田武志・宮本常一(翻訳) | |
| | | 1967、菅江真澄遊覧記(3)。 |
| | 中 道 等 | 1955、十和田村史。 |
| | 岩 淵 功 | 1999、八甲田の変遷。 |
| | 岩科小一郎 | 1968、山の民俗。 |
| | 木 村 謙 次 | 1793、北行日録。 |
| | 大 町 桂 月 | 1922、桂月全集。 |